

## 新 古筆資料の年代測定Ⅰ

——加速器質量分析法による炭素14年代測定——

池田 和臣  
小田 寛貴

はじめに

池田と小田は共同研究として、国文学および書道史にかかわる古筆切資料の書写年代を実証するために、かつ、加速器質量分析法による炭素14年代測定法の正確度・有効性を確かめるために、古筆切・古文書・古写経等の加速器質量分析法による炭素14年代測定を続けてきた<sup>(1)</sup>。本誌前々号においては、これまで十五年に涉っておこなってきた百点を超える炭素14年代測定のうちから、主な資料の測定結果を一覧にして示し<sup>(2)</sup>。また、昨年度が二〇〇二年度から交付されてきた文部科学省科学研究費補助金の最終年度であったため、本誌前号をもって年代測定の報告を終了するつもりでいた<sup>(3)</sup>。しかしながら、幸いなことに、本年度からまた新たに文部科学省科学研究費補助金の交付を得られることとなった。そこで、表題を「新 古筆資料の年代測定」と改め、ⅠからⅣの四回にわたって連載することとした。

はじめて加速器質量分析法による炭素14年代測定に接する人のために、古筆切および加速器質量分析法による炭素14年代測定についての概略を記しておきたいが、繰り返し旧稿<sup>(4)</sup>に述べもしたし、紙幅を費やさぬためにも、それについては省略にしたがう。ついては、旧稿「古筆切の年代測定——加速器質量分析法による炭素14年代測定——」〔中央大学文学部紀要〕二二四号、二〇〇九年三月、「続 古筆切の年代測定——加速器質量分析法による炭素14年代測定——」〔中央大学文学部紀要〕二二九号、二〇一〇年三月、「古筆切の年代測定Ⅲ——加速器質量分析法による炭素14年代測定——」〔中央大学文学部紀要〕二三四号、二〇一一年三月を参照されたい。

数値について確認しておく。一標準偏差(1 $\sigma$ )の誤差範囲内に真の年代が入る確率は六八パーセント、二標準偏差(2 $\sigma$ )の誤差範囲内に真の年代が入る確率は九五パーセントである。炭素14年代を歴史年代に較正したものが較正年代であり、( )内の数値である。( )の前の数値が誤差範囲の上限、( )の後の数値が誤差範囲の下限の歴史年代である。

なお、執筆分担は、資料解説が池田、測定結果の分析が小田である。

## I 書写年代が推定できる資料の年代測定

まず、外部徴証・内部徴証によって書写年代が想定されているもの、あるいは想定できるものについて述べる。書写年代が推定できる資料は、炭素14年代測定の正確度・有効性を確かめることができ、特段に貴重である。

### 一 伝寂蓮筆 新出 地獄草子詞書断簡(後白河法皇在世末期 一二世紀末頃)

ここに、「寂蓮法師<sup>佛事</sup>(守村の墨印)」「(古筆了仲)の極札をもつ新出断簡(架蔵)がある。料紙は楮紙、縦二六・一センチ、横二二・九センチ。料紙の縦寸の大きいこと、料紙に走る横皺、文字の字粒の大きいことなどから、絵巻物の詞書とおぼしい。六行にわたり、次のように書かれている。「佛事をとけんといふそのときうちにこゝゑありて

わか、たちをみてはたえてむか／ふへき人なしこゑき、てたにもたふ／へき人なければおもひなからいふこともなし／さいわいにきみきたりたまひたりたけ／き御こゝろなれはきみはかりこそゝのこゝろ」(／は改行を示す)。

意味をとつてみるなら、「……仏事を成し遂げようと言う。その時、家の中から声がして、『私の姿かたちを見ると、恐ろしがつて、面と向かうことのできる人がまつたくない。私の声を聞くことさえ恐ろしくて我慢できる人がいないので、思うことがあるのに誰かに言いかけることもしなかった。幸運なことに、そんな折りに、あなたがやって来られた。あなたは強い心を持っているので、あなただけでもその心……』という内容になる。

「佛事」とあるので、仏教に関連する書物の断簡らしいことはすぐにわかる。しかし、人が恐ろしがつて対面できないほどの、異様な姿や声をもった存在というのは、何なのだろうか。わずか六行の内容からでは、この断簡の正体を推しはかることは難しい。

\*

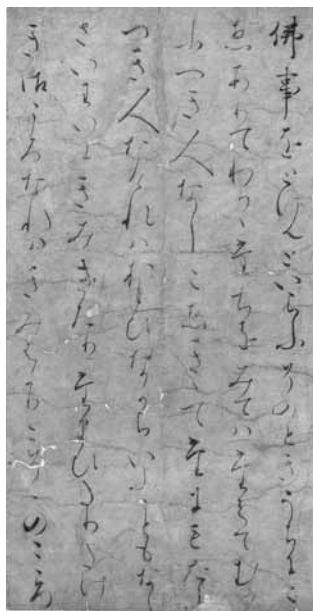


写真1 「伝寂蓮筆 地獄草子  
勘当の鬼詞書」

視点を変えて、書、筆跡の方面からアプローチしてみよう。この断簡の筆跡は悠揚迫らぬ典雅な字形、連綿の短い平明な書風で、いわゆる寂蓮様の筆跡の典型である。この寂蓮様の書風で、かつ絵巻の詞書であることを考え合わせると、すぐにある有名な作品群が想起される。それは、「地獄草子」諸本、「餓鬼草子」諸本、「病草子」諸本である。新出断簡の筆跡は、これらの詞書と非常に近い雰囲気をもっている。

これら「地獄草子」「餓鬼草子」「病草子」は、後白河法皇（一一二七―一九二）遺愛の品であり、かつて蓮華王院（三十三間堂）の宝蔵に納められていた一組の六道絵であったこと、そして、その一組の六道絵には「辟邪絵」（奈良国立博物館蔵・旧益田家地獄草子乙本）と「勘当の鬼図」（福岡市美術館蔵・旧松永記念館本）も含まれていたこと<sup>(5)</sup>、さらに、この「辟邪絵」と「勘当の鬼図」の詞書と旧安住院本「地獄草紙」（東京国立博物館蔵）の詞書とが同筆であることが、説かれている<sup>(6)</sup>。ちなみに、「辟邪絵」というのは疫鬼を懲らしめ退散させる善神をえがいた絵巻の断簡で、天刑星図、梅檀乾闥婆王図、神虫図、鍾馗図、毘沙門天図の五図が現存している。「勘当の鬼図」というのは、毘沙門天に仕えていた天邪鬼が勘当され切利天を追放される。この天邪鬼が、同じように天竺の寺を追放された僧侶と出会う。彼を肩に乗せて歩くと人々に浮遊して見え尊崇される。しかし、夜叉神に露見し鬼は僧を見捨て逃亡する、というもの。

そして、これら旧安住院本「地獄草子」・「辟邪絵」・「勘当の鬼」と、新出断簡の筆跡がまた同一なのである。福岡市美術館で「勘当の鬼図」一幅を閲覧させていただいたが、文字の同一ということだけでなく、料紙の質・縦寸・行間などまでまったく同一であり、同筆・同様式ということが確認できた。

新出断簡と旧安住院本「地獄草子」・「辟邪絵」・「勘当の鬼図」の詞書とが同筆であるということは、新出断簡がこれらのいずれかのツレ（同じ本の一部分）である可能性が高いということでもある。しかし、新出断簡の内容は地獄の有様を描いているとは思えない。つまり、「地獄草子」のツレではない。では、「辟邪絵」か「勘当の鬼図」か、どちらの可能性があるのだろうか。

興味深い記述が、『日本絵巻大成7』の「勘当の鬼図」の図版解説にある。「……詞書（模本・田中家蔵）によれば、寺を追われた心猛悪な僧が、毘沙門天の水精宮を勘当された鬼と仲良しになる。毘沙門天の使者たる夜叉がこれを見つけて、追う。鬼は沙門を放り出して逃げまどう。その苦しみのさまを、軽快な筆致でのびのびと描いている<sup>(7)</sup>。」とある。また、〈福岡県文化財データベース〉の「紙本著色地獄草紙断簡（勘当の鬼）」の「説明」には、「画面の話は次のようである。毘沙門天に仕えた鬼が、性猛悪のゆえに勘当された。鬼は、これまた猛悪心のゆえに

寺を追われた僧と、仲良しになった。鬼と僧は、鬼の姿が人に見えないのをいいことに、悪僧が鬼の肩に乗って人々に空を駆けると偽り、人々が尊んで供養する施物を受けて山分けしていた。ある時、鬼は下界に下った天上の夜叉に見つかつて追いかけられ、鬼はついに僧をすてて逃げだしたという話である。……詞書は前部一八行ほどが欠失しているが、その最後の詞書が右に見え、次のように読める。「勘当の鬼かなしみをたれて僧をいたたきからはしれともつひに僧をすてつわかみをなきになしてにけまとふそのくるしみたへかたし」……とある。

つまり、「勘当の鬼図」の詞書には模本があり、それによれば、現存詞書きは初めの一八行を失っているらしい。それならば、田中家所蔵の「勘当の鬼」の詞書模本をみれば、新出断簡が「勘当の鬼」の詞書の一部かどうか、すぐに判明するわけである。「田中家」は田中親美家のことと思われるので、御子孫である福田行雄氏にお伺いした。模本は所蔵していないが、御尊父（田中親美氏女婿福田喜兵衛氏）よりの伝聞として、「勘当の鬼は掛物にするには長いので詞を割って掛物にした」と聴いている由、ご教示をいただいた。さらに、縁者を煩わせて田中家御当主に照会していただいたが、やはり模本の存在は確認できなかった。残念ながら、「勘当の鬼図」の詞書模本は行方がわからない。

しかし、先に引いた記述の中に手がかりがもう一つある。詞書模本による内容の要約に、「心猛悪な僧」「猛悪心」の僧の存在が書かれている。一方、新出断簡には、「幸いに君来たり給ひたり。猛き御心なれば、君ばかりこそ」という表現があった。新出断簡の「猛き御心」の君とは、「勘当の鬼図」の「猛悪心」「心猛悪な僧」のことではないか。そうすると、新出断簡は「毘沙門天に勘当された鬼」と「心猛悪な僧」の出会いのくだりなのではないか、と推察されるのである。

\*

「餓鬼草子」「地獄草子」「病草子」などと一組で制作されたい「勘当の鬼図」、その失われた詞書の一部と思わ

れる新出断簡を年代測定にかけてみた。ちなみに、「餓鬼草子」「地獄草子」「病草子」の諸本の詞書は、それに近似する寂蓮様の筆跡との比較から、「治承二年（一一七八）の「賀茂社歌合」を上限とし、建久三年（一一九二）の「建久三年本大鏡」を下限とする時期、さらに狭めれば、一一八〇年代の成立と推定できるのではあるまいか」とされている<sup>(8)</sup>。はたして、その年代が出るだろうか。

測定結果は表1のとおりである。炭素14年代は $845 \pm 39$ 「BP」で、この $1\sigma$ （一標準偏差）の誤差範囲 $845 \pm 20$ 「BP」をINTCAL13 較正曲線により暦年代に較正した値が、 $1168 \pm 12$ （ $1212$ ） $1219$ 「cal AD」である。2 $\sigma$ （二標準偏差）の誤差範囲 $845 \pm 39$ 「BP」を暦年代に較正した値が、 $1160 \pm 12$ （ $1212$ ） $1250$ 「cal AD」である。2 $\sigma$ の誤差範囲は九五パーセントの確率でその中に実際の年代を含んでいるとされている。つまり、誤差範囲の上限が一一六〇年、下限が一二五〇年であり、この中に九五パーセントの確率で実際の年代が含まれていることになる。現存する六道絵が制作されたと推定されている一一八〇年代を含みこんだ結果となっている。後白河法皇遺愛の六道絵の一部である「勘当の鬼図」、その詞書のツレとみて矛盾しない年代測定の結果である。

表1 伝寂蓮筆 地獄草子詞書断簡の測定結果

炭素14年代「BP」	較正年代「cal AD」
$845 \pm 20$ ( $1\sigma$ )	$1168 \pm 12$ ( $1212$ ) $1219$
$\pm 39$ ( $2\sigma$ )	$1160 \pm 12$ ( $1212$ ) $1250$

## 二 百万塔陀羅尼（相輪印陀羅尼）とその類版

「百万塔陀羅尼」は、記録によって制作年代が確定できる世界最古の印刷物とされている。天平宝字八年（七六四）、称徳天皇（孝謙天皇の重祚）は藤原仲麻呂の乱（惠美押勝の乱）を平定した。その後、戦死者の菩提を弔い、



写真2 百万塔陀羅尼（相輪印陀羅尼）

鎮護国家を祈念すべく、六年の歳月を費やし、宝亀元年（七七〇）に陀羅尼百万卷（「無垢浄光大陀羅尼經」のうちの根本陀羅尼・自心陀羅尼・相輪陀羅尼・六度陀羅尼の四種）の印刷を完成させ、それを小塔に納め、大安寺・元興寺・法隆寺・東大寺・西大寺・興福寺・薬師寺・四天王寺・川原寺・崇福寺の十大寺に十万基ずつ奉納したのである（『東大寺要録』『続日本紀』による）。かくして、「百万塔陀羅尼」は奈良時代の宝亀元年（七七〇）に印刷された世界最古の印刷物とされているわけである。

しかし、一九六六年に韓国慶州の仏国寺の釈迦塔内部で発見された「無垢浄光大陀羅尼經」が、景德王十年（七五一）頃に刊行された最古の木版本とする新見が現れた（千惠鳳『韓国古印刷文化』大韓民国文化広報部海外公報館、一九八四年）。ただし、その制作年代、制作地については異論があり、それは「もともと中国で印刷された経卷の一部で、その寺院建造の時に朝鮮にもたらして慶典の用に供したと信じさせる多くの理由がある。」（錢存訓著、鄭如斯編、久米康生訳『中国の紙と印刷の文化史』5章、政法大学出版局二〇〇七年三月）という。また、仏国寺の釈迦塔の「無垢浄光大陀羅尼經」は、同時に発見された『太平四年三月仏国寺無垢浄光塔重修記』の解説によつて、一〇二四年の釈迦塔修理の折りに納入された可能性のあることも指摘された（朝鮮日報 二〇〇七年三月九日「スクープ 韓国木版印刷物は世界最古じゃなかった!」）。かくして、今もって「百万塔陀羅尼」は制作年代が明確な世界最古の印刷物と考えられているのである。

\*

陀羅尼の料紙は虫食い防止のために黄檗で染められた縦四・五センチほどの料紙で、一行

五字を配す。「百万塔陀羅尼」の制作されたとされる宝龜元年（七七〇）ころは、中国の漢字の世界ではすでに、王羲之は無論のこと、唐の四大家（欧陽詢・虞世南・褚遂良・顔真卿）の端正な楷書が完成されていた。日本においても天平写経の雄壮な漢字が書かれている時代であった。しかし、「百万塔陀羅尼」の書体は、日本三古碑（那須国造碑・多賀城碑・多胡碑）に近い雰囲気をもつ、至つて古雅で質朴な味わい深いものである。

測定した陀羅尼は相輪陀羅尼（廣部重汪氏蔵）で、測定結果は表2のとおりである。炭素14年代は1306「BP」で、この1 $\sigma$ （一標準偏差）の誤差範囲1306 $\pm$ 18「BP」をINTCAL13校正曲線により暦年代に較正した値が、668（678）689、750（）760「cal AD」である。2 $\sigma$ （二標準偏差）の誤差範囲1306 $\pm$ 36「BP」を暦年代に較正した値が、662（679）719、742（）766「cal AD」である。2 $\sigma$ の誤差範囲は九五パーセントの確率でその中に実年代を含んでいるとされる。すなわち、九五パーセントの確率で真の値が含まれる誤差範囲は六六二年から七六六年で、「百万塔陀羅尼」が制作された天平宝字八年（七六四）から宝龜元年（七七〇）の年代と重なる結果となっている。

表2 百万塔陀羅尼相輪陀羅尼の測定結果

炭素14年代「BP」	較正年代「cal AD」
1306 $\pm$ 18（ $\pm$ 1 $\sigma$ ）	668（679）689、750（）760
$\pm$ 36（ $\pm$ 2 $\sigma$ ）	662（679）719、742（）766

\*

ところで、一九三〇年頃に新出した自心印陀羅尼（現存二葉のみ、廣部重汪氏蔵）があり、それは大陸で制作されたもので、日本の百万塔陀羅尼と同時代の類版という説が出された（禿氏祐祥『百萬塔陀羅尼考證』泉山堂、一九三



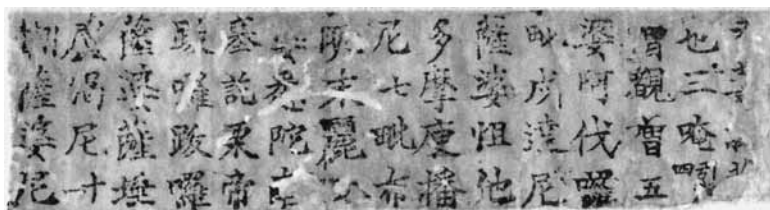


写真3 「百万塔陀羅尼類版」

三年)。すなわち、「新出本は字体は全く宝亀本とは異り、我国で印刷されたものでない事を示してゐる。……仮定説を設けるならば支那に於ては唐代にこの『無垢淨光經』四種陀羅尼の印刷が行はれ、この行事が我国に伝はつて宝亀元年の百万小塔造立となり、また一方に於ては朝鮮に伝はつてこの新出本となつたしたのである。宝亀本と新出本との間柄は親子関係ではなく、兄弟または従兄弟の様なものであらう。年代は宝亀本よりも降るかも知れないが、大なる間隔はなからうと思ふ。」という説である。

この禿氏氏の見立てが正しければ、新出自心印陀羅尼は日本の百万塔陀羅尼の料紙と近似した年代が出るはずである。測定の結果は、表3のとおりで、九五パーセントの確率で誤差範囲の中に実際の年代を含んでいるとされる二標準偏差(2シグマ)の誤差範囲が、1527(—)1553、1633(1645)1656「cal AD」であつた。つまり、誤差範囲の上限が一五二七年、下限が一六五六年である。奈良時代のものでなく、室町時代から江戸時代のものであつた。残念ながら「百万塔陀羅尼」の類版とすることは出来ない。ここに禿氏氏の説を訂正しておく。

表3 新出の自心印陀羅尼經の測定結果

炭素14年代「BP」	較正年代「cal AD」
275 ± 17 (± 1σ)	1641 (1645) 1649
± 35 (± 2σ)	1527 (—) 1553、1633 (1645)
	1656

## Ⅱ 書写年代不明の資料の年代測定

### 一 伝源俊頼筆 民部切古今集切

次に、書写年代不明の資料の測定結果について述べる。まず、伝源俊頼筆民部切古今集切について。

民部切は古今和歌集の写本の断簡。料紙は、白の胡粉を引いた地に雲母で鳳凰唐草文の文様を刷りだした唐紙。伝称筆者は源俊頼（一〇五五頃―一二一九）。高野切二種系統の筆跡とされ、書写年代は十一世紀半ばから末とするものが多い<sup>(9)</sup>。

しかし、民部切にはいくつかの不審な点がある。その中には、民部切の書写年代にかかわる重大な疑問点もある。まずは、①料紙についての疑問。宋代の唐紙とするもの<sup>(10)</sup>、鎌倉期の粗雑な和製唐紙とするものがある<sup>(11)</sup>。次の不審は、②まったく同じ部分の断簡が二葉（『古筆学大成2』の図版二〇四と二〇五）存在すること。字母にいささかの異同があり、作者名表記に「業平朝臣」と「なりひらの朝臣」の違いがあるが、料紙・筆跡はまったく同じである。同一人物が二度、同様の写本を書写したと想定されている<sup>(12)</sup>が、そんなに都合のよいことがあるだろうか。それならば、重なる部分の断簡が複数あってもよさそうに思うのだが。

最大の問題点は、「民部類切」と呼ばれる断簡の存在である。料紙は民部切の唐紙とは異なり何の装飾もない素紙であるが、筆跡・書写形態は民部切とまったく同じとされている。三葉あり、一葉は古今集八八〇番歌から八八二番歌までを書いたもの、一葉は新古今集の一六二番歌と一六三番歌を書いたもの、もう一葉は拾遺抄五二五番の読人不知の歌を書いたもの。この中の新古今集を書いた「民部類切」は、歌の配列・詠者名・詞書・歌の表現の細部に至るまで、まったく新古今集と異同がない。偶然新古今集と一致する部分を有する別の散佚私撰集を想定するより、やはり新古今集を書いたものと思えない。とすると、古今集・新古今集・拾遺抄が書かれている「民部類切」の正体は、いったい何なのだろうか。はたまた、それと同筆の民部切古今集との関係はいかなるものなのか。不思議であ

り、また不審でもある。

合理的に考えれば、次のような見解が道理であろう。「この書（民部切）と同手と思われるもので新古今集を書写している断片がある。……その詞書及び歌首の配列等からしても新古今集であることは否定出来ない。そして書風においてもこれを異筆と見ることは到底不可能と思われる。従つて本書（民部切）の書写年代は新古今集撰進の前後と見るのが妥当ということになる<sup>(13)</sup>」、「これと同手と思われるもので、『新古今集』を書写した断簡があつて『民部類切』と呼ばれています。白紙に書かれているので見栄えがしませんが、これを同筆とすれば、『新古今集』の撰進された元久二年（一二〇五）以後、すなわち鎌倉初期のかなという事になります。こんな古態なかなを書いた人が、鎌倉初期にいたわけで、平家時代にすでに鎌倉風の伝雅経・伝寂蓮のかなが隆能源氏の詞書に見られるのと好対照です<sup>(14)</sup>」。ただし、民部切は平安時代で、民部類切は鎌倉時代とする見解もある<sup>(15)</sup>。はたして民部切はいつの時代の書なのだろうか。

＊

所蔵者の御厚意で、一葉の民部切（九一七番歌詞書の末から九一八番歌まで）の年代測定をおこなった。縦二五・九センチ、横一六・三センチ。「まうてけるに讀てつかはしける／壬生忠岑／すみよしとあまはつくともなかる／すな人わすれくさおふといふなり／なにはへまかりける時たみの、／しまにてあめにあひてよめる／あめによりたみの、／しまをけふゆけは／なにはかくれぬものにそありける」と八行書き。本文は流布本（藤原定家筆貞応本・嘉禄本）に一致するが、諸本が二首目の詠者を「貫之」とするのに対して、本断簡には詠者名が書かれていない。測定の結果は表4のとおりで、驚くべきものであつた。九五パーセントの確率で誤差範囲の中に実際の年代を含んでいるとされる二標準偏差（2シグマ）の誤差範囲は、1642（1650）1665、1785（）1793「cal AD」であつた。つまり、誤差範囲の上限が一六四二年、下限が一七九三年で、（）内の一六五〇年が炭素14年代

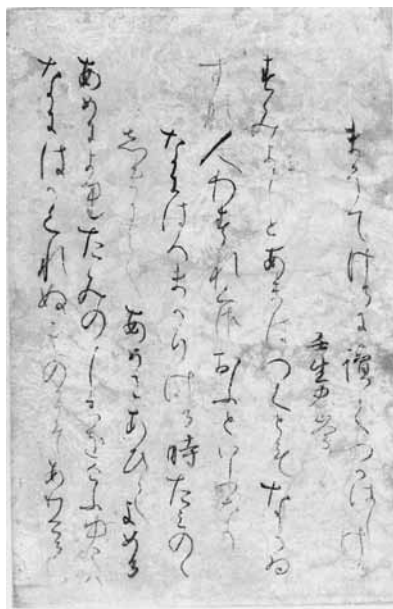


写真4「民部切」①

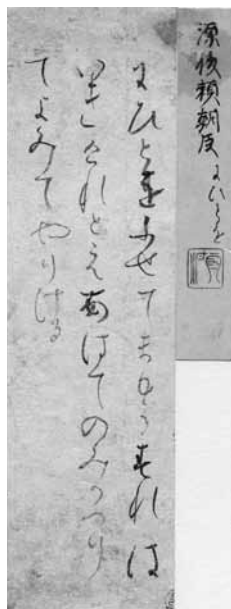


写真5「民部切」②

に対応する最も確率の高い歴史年代ということになる。民部切は江戸時代の料紙に書かれていることになる。

江戸時代初期には荒木素白（一六〇〇～一六八五）などの上代様の名手があり、唐紙に和歌や物語を書いたものが伝存している。それゆえ、上代様の筆跡が江戸時代に書かれることは、なんの不思議でもない。しかし、あの古態の文様の唐紙が江戸のものとは、にかには信じられない。裏打ち紙が混ざった恐れを考慮して再測定するとともに、新たに別の民部切をも測定してみることにした。

一葉目の再測定の結果は、二標準偏差（2シグマ）の誤差範囲が、1644（1656）1667、1782（1792、1950〔「cal AD」であった。つまり、誤差範囲の上限が一六四四年、下限は現代にまで及んでしまうが、（）内の一六五六年が炭素14年代に対応する最も確率の高い歴史年代ということになる。ほぼ一回目の測定結果と変わらない。

二葉目（架蔵）は、六三三番歌の詞書の末部で、「にひとをふせてまもらすれば／いきけれとえあはてのみかへり／てよみてやりける」の三行。本文はやは

り流布本に一致し、平安時代書写の元永本・卷子本・大江切などとは小異がある。縦二・九センチ、横六・八センチ。測定結果は、二標準偏差（2シグマ）の誤差範囲は、1648（1664）1672、1788（）1799、1942（cal AD）であった。つまり、誤差範囲の上限が一六四八年、下限は現代まで及んでしまうが、（）内の一六六四年が炭素14年代に対応する、最も確率の高い歴史年代ということになる。一葉目の二度におよぶ測定結果とはほぼ同じ結果である。やはり、民部切は江戸時代の料紙に書かれていることになる。炭素14年代測定の結果としては、民部切は江戸時代の筆跡という結論になる。

これまでになされてきた平安時代か鎌倉時代かという議論とあまりにかけ離れた結果である。しかし、民部切には前に述べたいくつかの不審がある。三度に及ぶ厳密な科学的測定結果として、ここに民部切が江戸時代書写であるデータを表しておく。なお、測定した二葉が偶然江戸時代の写しであるという、万が一の可能性も留保して、新たな民部切の測定試料の提供を待ち受けたと思う。

表4 伝源俊頼筆「民部切」①の測定結果

炭素14年代「BP」		較正年代「cal AD」	
251 ± 17	(av. ± 1σ)	1646	(1650) 1660
± 33	(av. ± 2σ)	1642	(1650) 1665、1785 ( ) 1793
伝源俊頼筆「民部切」①の再測定の結果			
炭素14年代「BP」		較正年代「cal AD」	
237 ± 18	(av. ± 1σ)	1649	(1656) 1664、1788 ( ) 1791
± 36	(av. ± 2σ)	1644	(1656) 1667、1782 ( ) 1792、1950 ( )

## 伝源俊頼筆「民部切」②の測定結果

炭素14年代「BP」

較正年代「cal AD」

220 ± 19 (a.v. ± 1σ)

1655 (1664) 1667、1782 ( ) 1796

± 38 (a.v. ± 2σ)

1648 (1664) 1672、1788 ( ) 1799、1942 ( )

## 二 伝称筆者不明 後拾遺集切

後拾遺和歌集は第四番目の勅撰集、白河天皇勅命、撰者藤原通俊である。応徳三年（一〇八六）春に草稿本作成、同年九月に奏覧本完成、寛治元年（一〇八七）に再奏本完成。草稿本・奏覧本・再奏本の三系統があるはずだが、それぞれ原形を伝える純粋な写本は存在しないと言われている。そういう伝本状況にあつて、数少ない平安末期書写にかかる中院切、棕切（糟色紙）などは、本文資料として貴重である。

ここに、ツレの知られていない、伝称筆者未詳の後拾遺集の断簡（架蔵）がある。料紙斐楮混ぜ漉き、縦二二・八センチ、一四・三センチ。卷十五、雑一の十行。次のように記されている。「春ころためよりなかつたうなとあいとものに哥／よみはへりけるにけふ。ことをはわするなと／いひわたりてのちためよりのあそんみま／かりてまたのとしのはるなかつたうかもと／につかはしける／中務卿さたひらの親王／いかなれやはなのにはいもかはらぬをすきにし／春のこひしかるらん／よしのふみまかりてのち四十九日のうちに／かふりたまはりて侍りけるに大江匡衡かもとに」。冷泉家蔵為家相伝本との本文異同を示すと次の通り。「春ころ」（断簡）↓「はるのころ」（為家相伝本）、「ためよりのあそんみまかりて」↓「ためよりみまかりて」、「中務卿さたひらの親王」↓「中務卿具平親王」、「にほい」↓「にほひ」、「大江匡房かもとに」↓「大江匡房かもとより」。歌の作者は為頼・長能との関係からみて、「貞平」ではなく「具平」の方が正しい。

本文的には誤写があるが、筆跡が伝藤原俊成筆御家切古今集などに似通うので、平安末から鎌倉初期にかけての後拾遺集の写本なら、書写年代の古いものになるので、年代測定にかけてみた。測定結果は表5のとおりである。

表5 伝称筆者未詳後拾遺集断簡の測定結果

炭素14年代「BP」	校正年代「cal AD」
845 ± 18 (± 1σ)	1169 ( ) 1176、1181 (1212) 1219
± 36 (± 2σ)	1161 (1212) 1225、1232 ( ) 1244

炭素14年代は845「BP」で、この1σ（一標準偏差）の誤差範囲845±18「BP」をINTCAL13校正曲線により暦年代に校正した値が、1169（ ）1176、1181（1212）1219「cal AD」である。2σ（二標準偏差）の誤差範囲845±36「BP」を暦年代に校正した値が、1161（1212）1225、1232（ ）1244「cal AD」である。2σの誤差範囲は九五パーセントの確率でその中に実

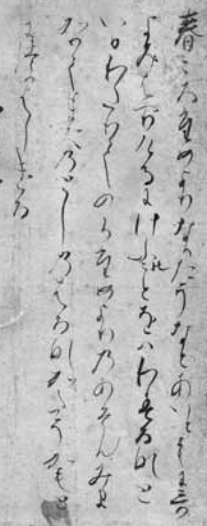


写真6 「後拾遺集切」

年代を含んでいるとされる。すなわち、九五パーセントの確率で真の値が含まれる誤差範囲は一一六一年から一二四四年である。平安末期から鎌倉初期の結果となつている。炭素年代の一二二二年近辺とすれば鎌倉の極初期ということになる。後拾遺集の書写本としては古いもので、ツレの出現が期待される。

### 三 伝後光厳院筆 夜の寢覚散佚部分断簡

菅原孝標の女作とされる、平安時代後期物語の代表作「夜の寢覚」は、実は現存諸本すべて中間部と末尾に欠卷がある。近年、その欠卷部分に関わる資料が数



写真7 「夜の寝覚散佚部分断簡」

しめすにも御むねいたく心やましき  
 をおほししつめて御ものかたりこまやかに  
 せさせ給におと、もあはれむかしの人に御  
 心さしふかくおほししめたりしものを  
 あはれにありかたくなとおほしいつるにも  
 いとしのひかたきをせめてもてまきはら  
 たまふけしきさなめりと御らんするにも  
 御かほの色うつろふ心ちしてかはかりの御身  
 をもしらせ給はすひたふるにたえこもりお  
 ほしめさるゝいかはかりの人ならんとゆかし  
 きに中宮の御ことなどによるこはせたまひて

種、発見された。その中に末尾欠巻部分の断簡であろうという見解の提出された、伝後光厳院筆の物語切があつた<sup>(16)</sup>。反論も出されたが、結局、決定的な断簡が発見され、末尾欠巻部の貴重な資料であることが判明した<sup>(17)</sup>。さて、これら欠巻部分の断簡はいつの時代の書写にかかるとのか。架蔵断簡を年代測定にかけてみた。測定結果は表6のとおりである。炭素14年代は589「BP」で、この1 $\sigma$ (一標準偏差)の誤差範囲589 $\pm$ 17「BP」をINTCAL13 較正曲線により暦年代に較正した値が、1316(1325、1344)1354、1389(1394)1402「cal AD」である。2 $\sigma$ (二標準偏差)の誤差範囲589 $\pm$ 35「BP」を暦年代に較正



した値が、1305 (1325、1344) 1364、1384 (1394) 1409 [cal AD]である。九五パーセントの確率でその中に実年代を含んでいるとされる2σの誤差範囲は、一三〇五年から一四〇九年である。鎌倉末期から室町初期の結果となっている。後光厳院 (1338-1374) の時代を含んだ結果である。南北朝頃の筆跡とみて大過あるまい。

表6 伝後光厳院筆 夜の寢覺散佚部分断簡の測定結果

炭素14年代 [BP]		較正年代 [cal AD]	
589 ± 17 (± 1σ)	1316 (1325、1344)	1354、1389	(1394) 1402
± 35 (± 2σ)	1305 (1325、1344)	1364、1384	(1394) 1409

#### 四 山路の露 (源氏物語続篇) 断簡

「山路の露」は後人の手になる源氏物語の補作の一帖。男主人公薫君と女主人公浮舟が再会することなく終わる源氏物語最終帖「夢浮橋」、それに満たされなかった後の時代の人間が二人を再会させる一帖を補ったのである。著作権などなかった古典文学の時代には、普通に行われたことである。作者として、藤原行成の六代目の子孫で時の能筆家でもあった藤原伊行説がある。書道の秘伝書として名高い「夜鶴庭訓抄」は伊行の著作である。能筆家としてだけでなく、伊行は物語とも深い関わりがある。現行の伊勢物語の六九段、すなわち〈伊勢斎宮との禁忌の恋〉の段が初段に置かれた「狩の使」本と呼ばれる異本がある。これは、伊勢物語という書名を伊勢斎宮の段を初段に置くことで合理化しようとした、伊行の所業であると、藤原定家は非難している。また、源氏物語の最初の注釈書である「源氏釈」(「伊行釈」とも)の作者でもある。このような伊行と物語のかかわりから、「山路の露」作者説がとえられたのである。伊行のむすめの右京大夫作者説もある。その著作「建礼門院右京大夫集」との文体の酷似によるものである。これらの説によれば、いずれにせよ平安末から鎌倉初期の成立ということになるが、それほど古い成立と考え

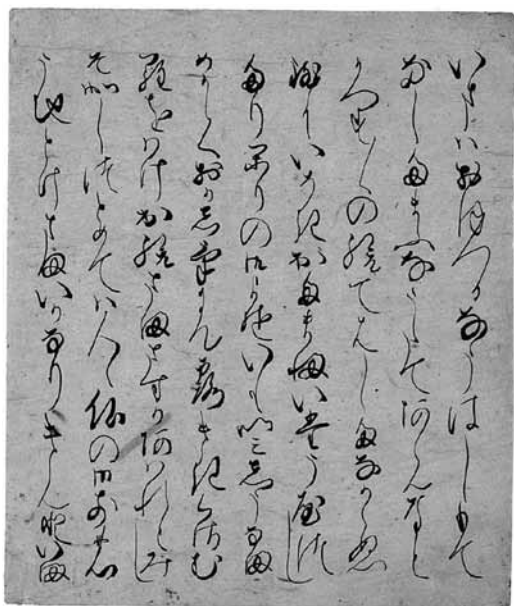


写真8 「山路の露」

いまはおはつかうはしもて  
 なしたまふなうたてあらんなど  
 かへすくの給てはしたなからぬ  
 程にいそき出たまふいたうやつし  
 たりかりの御よそいもいみしうなま  
 めかしくおかしけにて露けきくさむ  
 らをはけ出給さまさすかあはれとみし  
 そかしつとめては人く仏の御前の  
 うちとけさまいかなりけんといま

ない説もある。

伝本は、写本と版本が数本存在するが、近世期のものだけである。しかし、古筆切の中に中世までさかのばれそうな「山路の露」の断簡が存在する。それらはいつ頃の書写にかかる断簡なのか、架蔵断簡を年代測定にかけてみた。結果は表7のとおり。炭素14年代は369「BP」で、この1 $\sigma$ （一標準偏差）の誤差範囲369 $\pm$ 18「BP」をINTCAL13較正曲線により暦年代に較正した値が、1465（1484）1500、1501（1512、1601）（1616「cal AD」である。2 $\sigma$ （二標準偏差）の誤差範囲369 $\pm$ 35「BP」

を暦年代に較正した値が、1452 (1484) 1522、1573 ( ) 1628 [cal AD]である。九五パーセントの確率でその中に実年代を含んでいるとされる2σの誤差範囲は、一四五二年から一六二八年である。炭素年代の一四八四年近辺とすれば室町時代の書写ということになる。

表7 山路の露(源氏物語続篇) 断簡の測定結果

炭素14年代「BP」	較正年代「cal AD」
369 ± 18 (± 1σ)	1465 (1484) 1500、1501 ( ) 1512、
± 35 (± 2σ)	1601 ( ) 1616
	1452 (1484) 1522、1573 ( ) 1628

## 五 珠光達磨図



写真9 珠光達磨図

「珠光」の印を有する達磨図がある(早稲田大学会津八一記念館蔵)。「珠光」とは村田珠光のことと思われる。村田珠光(一四二二あるいは一四二三―一五〇二)なら、室町時代中期の茶人にして禅僧。一休宗純に参禅したと伝わる、「わび茶」の創始者。能阿弥、足利義政とも関わりが深い。この「珠光」印の達磨図は、村田珠光の時代のものであろうか。料紙が上中下に三紙継いであるので、それぞれ別に測定した。測定結果は表8のとおりである。中部が上部および下部よりやや古く、上部と下部はほぼ同じ年代であった。九

五パーセントの確率でその中に実年代を含んでいとされる $2\sigma$ の誤差範囲は、上部と下部が一四八七年から一六四二年、中部が一四四六年から一六一五年である。誤差範囲が大きい、村田珠光の生存期と重なる結果が出ている。「珠光」は村田珠光である可能性が認められる。

表8 珠光達磨の測定結果

①料紙上部	
炭素14年代「BP」	較正年代「cal AD」
$326 \pm 18$ ( $\pm 1\sigma$ )	$1515$ ( $1523$ ) $1530$ , $1540$ ( $1559$ , $1562$ , $1571$ ) $1598$ , $1617$ ( $1630$ ) $1635$
$\pm 35$ ( $\pm 2\sigma$ )	$1487$ ( $1523$ , $1559$ , $1562$ , $1571$ ) $1604$ , $1607$ ( $1630$ ) $1642$
②料紙中部	
炭素14年代「BP」	較正年代「cal AD」
$394 \pm 18$ ( $\pm 1\sigma$ )	$1450$ ( $1459$ ) $1478$
$\pm 35$ ( $\pm 2\sigma$ )	$1446$ ( $1459$ ) $1493$ , $1602$ ( ) $1615$
③料紙下部	
炭素14年代「BP」	較正年代「cal AD」
$325 \pm 18$ ( $\pm 1\sigma$ )	$1515$ ( $1523$ ) $1530$ , $1539$ ( $1559$ , $1563$ , $1570$ ) $1597$ , $1617$ ( $1631$ ) $1635$
$\pm 35$ ( $\pm 2\sigma$ )	$1608$ ( $1631$ ) $1642$

注

- (1) 池田和臣・小田寛貴「加速器質量分析法による古筆切および古文書の14C年代測定」(『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(XII)』名古屋大学年代測定総合研究センター、二〇〇一年三月)、池田和臣「加速器質量分析法による古筆切および古文書の14C年代測定」(『中央大学文学部紀要』一八九号、二〇〇二年二月)、小田寛貴・池田和臣・増田孝「古筆切・古文書のAMS14C年代測定―鎌倉時代の古筆切を中心に―」(『名古屋大学加速器質量分析計業績報告書(XV)』名古屋大学年代測定総合研究センター、二〇〇四年三月)、池田和臣「古筆切の年代測定について―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(久下裕利・久保木秀夫編『平安文学の新研究 物語絵と古筆切を考える』新典社、二〇〇六年)。池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(『中央大学文学部紀要』二二四号、二〇〇九年三月)、池田和臣・小田寛貴「続古筆切の年代測定―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(『中央大学文学部紀要』二二九号、二〇一〇年三月)、池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定Ⅲ―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(『中央大学文学部紀要』二三四号、二〇一一年三月)、池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定Ⅳ―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(『中央大学文学部紀要』二三九号、二〇一二年三月)、池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定Ⅴ―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(『中央大学文学部紀要』二四九号、二〇一四年三月)など。
- (2) 池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定Ⅵ―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(『中央大学文学部紀要』二五四号、二〇一五年三月)。
- (3) 池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定 補遺―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(『中央大学文学部紀要』二五九号、二〇一六年三月)。
- (4) 池田和臣「古筆切の年代測定について―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」『平安文学の新研究 物語絵と古筆切を考える』新典社二〇〇六年九月)、池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(『中央大学文学部紀要』二二四号、二〇〇九年三月)。池田和臣・小田寛貴「続古筆切の年代測定―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(『中央大学文学部紀要』二二九号、二〇一〇年三月)、池田和臣・小田寛貴「古筆切の年代測定Ⅲ―加速器質量分析法による炭素14年代測定―」(『中央大学文学部紀要』二三四号、二〇一一年三月)。
- (5) 宮島新一「辟邪絵―わが国における受容」『美術研究』三三一号、一九八五年三月。

- (6) 古谷稔『餓鬼・地獄・病草子の詞書の書風』（『日本絵巻大成7』中央公論社、一九七七年）。
- (7) 小松茂美編『日本絵巻大成7』（中央公論社、一九七七年）。
- (8) 注（6）の古谷論文。
- (9) 小松茂美『古筆学大成 第2巻』（講談社、一九八九年）。
- (10) 注（9）に同じ。
- (11) 飯島春敬『名宝古筆大手鑑』（東京堂出版、一九八〇年）。
- (12) 注（9）に同じ。
- (13) 注（11）に同じ。
- (14) 植村和堂『古筆名葉展』（根津美術館編集、一九九二年）。
- (15) 春名好重『古筆大辞典』（淡交社、一九七九年）。
- (16) 仁平道明『「夜の寝覚」 末尾欠巻部断簡』（『狭衣物語の新研究』神典社、二〇〇三年）。池田和臣「伝後光厳院筆『夜の寝覚』 末尾欠巻部―寝覚上は二度死に返る―」（『古筆資料の発掘と研究』青簡社、二〇一四年）。
- (17) 横井孝『「夜の寝覚」 末尾欠巻部断簡の出現』（『王朝文学の古筆切を考える』武蔵野書院、二〇一四年）。

## 謝辞

本稿において報告した古筆切の炭素14年代は、パレオ・ラボ CompactAMS (CAMS-500<sup>+</sup> アメリカ NEC 社製15SDH)、名古屋大学タンデトロン (Model130-AMS<sup>+</sup> オランダ HVEE 社製) によって測定されたものである。株式会社パレオ・ラボAMS年代測定グループの伊藤茂氏、安 昭炫氏、佐藤正教氏、廣田正史氏、山形秀樹氏、小林纈一氏、Zaur Lomaidze 氏には炭素14年代測定を行うにあたり大変お世話になりました。心より感謝いたします。

なお、本研究は文部科学省科学研究費補助金（基盤研究（B）、（課題番号…16H03101、研究代表者…小田寛貴）の一部を用いた成果である。記して、感謝いたします。